

令和4年
4月26日

病害虫発生予報 5月号

茨城県病害虫防除所

水田・レンコン田に農薬を使用した後は止水期間を守り、
成分の流出防止や防除効果の確保に努めましょう。

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦：赤かび病	1
ナシ：黒星病	1
ナシ：ナシヒメシクイ、アブラムシ類	2
半促成ピーマン：アザミウマ類	3
施設野菜：灰色かび病	3

【その他の病害虫】

促成ピーマン、半促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、夏ネギ	4
○施設野菜の栽培終了後の管理について	4
○サツマイモ基腐病の防除対策（定植期～生育初期）	5

II. 今月の気象予報 6

(巻末資料) 病害虫発生予報の見方について

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>

フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並～やや遅い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 農研速報(4月18日発表)によると、さとのそらの出穂期は龍ヶ崎市で平年より2～5日遅い。
- ② 気象予報によると向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 小麦における防除適期は、開花始期～開花期(出穂期7～10日後頃)である。地域によって生育にばらつきがあるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除を実施する。
- ② 予測防除適期は、病害虫速報No.2(令和4年4月14日発表)に記載した予測日より3～4日早まると予想されるので注意する。
- ③ 赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適条件は、「日最低気温10℃以上、日最高気温15℃以上の条件を満たし、湿度80%以上の日か降雨日とその翌日」である。飛散好適条件が続く場合は、1回目の薬剤散布の7～10日後に2回目の散布を行う。
- ④ 薬剤を選定する際は、収穫前日数や使用回数に十分注意する。また、2回以上散布する際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を用いる。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、発病花そう率(本年値0.2%、平年値0.2%)、発生地点率(本年値20%、平年値20%)はともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 花そう基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第花そうごと除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- ② 落葉上の子のう胞子は4～5月に降雨があるたびに飛散し、葉や果実に感染するので注意する。
- ③ 薬剤防除は、生育ステージをよく観察し、気象情報に注意して適期に確実に実施する。
- ④ 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(ナシ 続き)

2. ナシヒメシンクイ (越冬世代～第一世代)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、土浦市、筑西市、かすみがうら市で平年より多く、笠間市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 交信かく乱剤を使用する場合は、第一世代以降の成虫を対象に5月中旬までに設置する。
- ② 薬剤散布の際は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

3. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、寄生新梢率(本年値1.7%、平年値1.5%)、発生地点率(本年値45%、平年値30%)はともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は、特に新梢を加害する。被害を受けると葉が巻き防除しにくくなるため、初期防除を徹底する。
- ② 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に、新梢に薬液がかかるよう丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、寄生花率（本年値 90.5%、平年値 62.7%）は平年よりやや高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 17.9頭、10年平均値 9.5頭）は平年よりやや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルス病を媒介するので、発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が花や果実にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、影響の小さい薬剤を選択する。

施設野菜

1. 灰色かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い (促成ピーマン)	県下全域
	やや多い～多い (半促成ピーマン、促成キュウリ)	
	やや多い (促成トマト)	

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、促成ピーマンにおける発病株率（本年値 7.0%、平年値 0.1%）は平年より高い。
- ② 4月下旬現在、半促成ピーマンにおける発病株率（本年値 0.5%、平年値 0%）は平年よりやや高い。
- ③ 4月下旬現在、促成キュウリにおける発病株率（本年値 2.0%、平年値 1.4%）は平年よりやや高い。
- ④ 4月下旬現在、促成トマトにおける発病株率（本年値 17.6%、平年値 14.3%）は平年並～やや高い。
- ⑤ 気象予報によると向こう 1 か月の日照時間は平年より少ないと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 罹病部や幼果に残った花弁はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 薬剤散布は、晴れた日の午前中に行う。また、曇雨天が続き薬液が乾きにくい場合は、くん煙剤を利用する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ピーマン	斑点病	発生量：平年並（促成・半促成）	4月下旬現在、促成、半促成作型ともに、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：平年並（促成）、やや少ない（半促成）	4月下旬現在、促成作型では平年並、半促成作型では平年よりやや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並（促成）	4月下旬現在、平年並の発生である。
トマト 促成	オンシツコナジラミ	発生量：やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
促成キュウリ	菌核病	発生量：やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。一部圃場で発生が認められている。
	うどんこ病	発生量：平年並	4月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病		
夏ネギ	さび病	発生量：平年並	4月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並～やや多い	4月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並	4月下旬現在、平年並の発生である。

施設野菜の栽培終了後の管理について

促成キュウリおよび促成ピーマンにおいて、微小害虫が媒介するウイルス病（キュウリ退緑黄化病、ピーマン黄化えそ病）の発生を一部圃場で認めました。

栽培終了後の野菜施設では、次作の病害虫防除のための管理を適切に行いましょう。

アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類等の微小害虫は、各種ウイルス病を媒介するので、ハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、株を誘引したまま根を引き抜き、2週間程度ハウスを密閉し、蒸し込みを行います。蒸し込み終了後は、作物残渣をハウス外へ持ち出して適切に処分してください。

サツマイモ基腐病の防除対策（定植期～生育初期）

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中、地上部の茎葉が枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。

育苗から生育期、収穫から貯蔵まで年間を通して被害が拡大するおそれがあるので、侵入防止と早期発見・早期対策に努めましょう。

【病気の特徴】

本病は糸状菌（カビ）により引き起こされ、保菌した苗・イモ・残さ（葉や茎の残がい）等が伝染源となります。見かけ上は健全な苗やイモでも保菌している可能性があり、注意が必要です。

【侵入防止のために】

- ・ 来歴が不明な種イモや苗を絶対に持ち込まない。
- ・ 採苗に使うハサミをこまめに洗浄、消毒しながら、苗は地際から5 cm以上の位置で切り取る。
- ・ 採苗後は速やかに苗消毒を行う。
 - ※苗消毒用の薬液は、使用当日に調製し、翌日以降に持ち越さない。
 - ※苗消毒の薬剤は、植え付け前1回限りの使用となるので遵守する。
- ・ 切り苗を購入するときは、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

【侵入に備えた準備】

- ・ 排水の悪い圃場は発病しやすいため、明きょ設置や耕盤破碎、枕畦の途中に排水溝を設置するなど、排水対策を徹底しておく。
- ・ 他の圃場への拡散を防ぐため、作業する圃場ごとに農機具や長靴等についた土をよく落とし、きれいに洗浄する。
 - ※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。
(排水が圃場に流れ込まないところで行う)

【早期発見のために】

- ・ 万が一の発生に備え、圃場ごとに使用した苗を追跡できるよう、①植え付けた苗の苗床の（あるいは苗床内の）場所、②採苗日、③植付日、④ウイルスフリー苗などの購入苗の場合にはその購入先を記録しておく。
- ・ 茎葉が繁茂すると発病株の発見が困難になるため、茎葉が地上部を覆う前までの期間（発病株を見つけやすい時期）は特に、①巻葉や株の萎縮、②葉の変色（赤変・黄変）、③株元の茎の黒変がないか圃場をよく観察する。

※本病が疑われる症状を見つけた場合は、抜き取ってしまわずに、まず直ちに各地域の農業改良普及センターまで連絡してください。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 4月23日から5月22日)

気象庁(4月21日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	10	30	60
降水量	関東甲信全域	20	30	50
日照時間	関東甲信全域	50	30	20

[概要]

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 4月23日(土曜日)から4月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<2週目の予報> 4月30日(土曜日)から5月6日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報>5月7日(土曜日)から5月20日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。

病害虫発生予報の見方について

病害虫防除所では、向こう1か月の病害虫の発生を予測した病害虫発生予報を毎月下旬に発表しています。

予報の作成にあたっては、職員による圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果を過去のデータと比較し、病害虫防除員からの情報、各病害虫の発生生態や向こう1か月の気象予報等を考慮して検討しています。ここでは予報をよりよく理解していただくため、予報の見方について説明しますので参考にしてください。

【注意すべき病害虫】 向こう1か月の間に多発生が懸念され注意を要する病害虫や、例年その月に発生が問題となる病害虫について記載しています。

1. ハダニ類
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

予報の対象地域

向こう1か月の予測を、「平年値」との対比により記載します。
平年より
「早い」(6日以上)
「やや早い」(3~5日)
「平年並」
「やや遅い」(3~5日)
「遅い」(6日以上) 等で表記します。
特定しない場合は、「-」で表記します。

向こう1か月の予測を、「平年値」との対比により記載します。
平年より
「多い」
「やや多い」
「平年並」
「やや少ない」
「少ない」 等で表記します。
特定しない場合は、「-」で表記します。

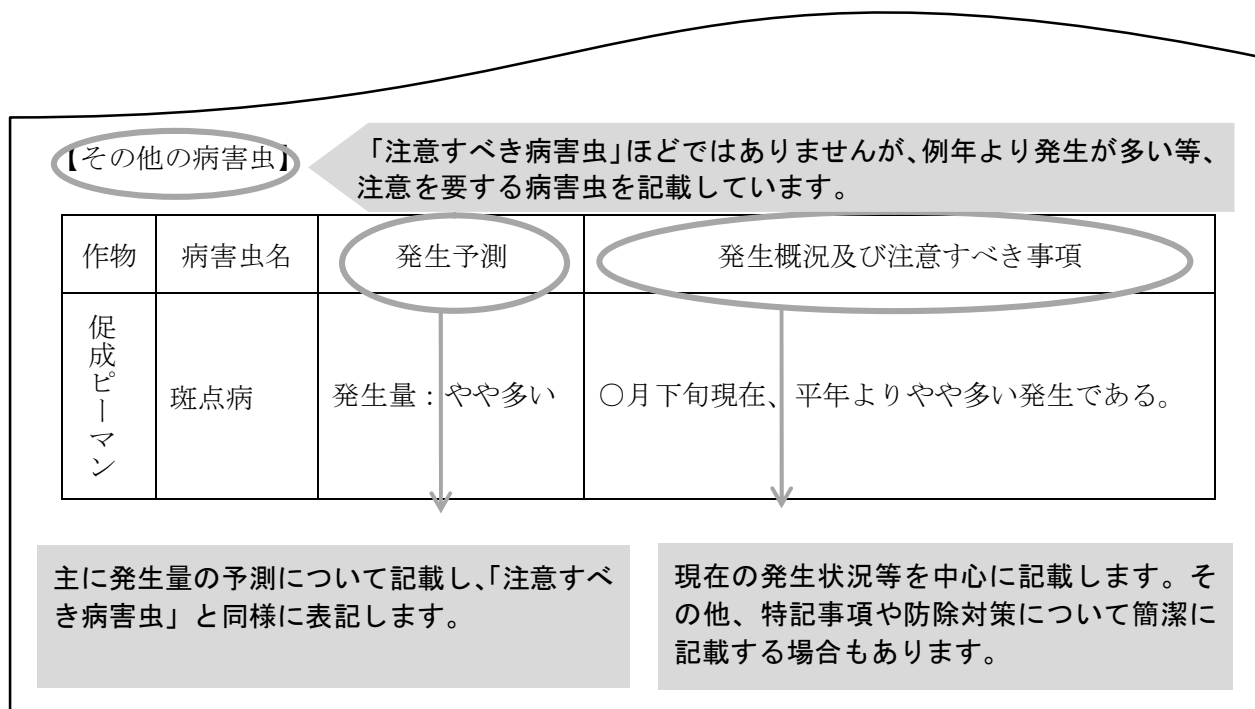
【予報の根拠】 予報内容の根拠を記載します。圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果に基づく現在の発生状況、予想される気象条件が対象病害虫に及ぼす影響等について記載しています。

① ○月下旬現在、被害葉率、発生地点率ともに平年より高い。
② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

【防除上注意すべき事項】 防除を行う際に、注意すべき事項等について簡潔に記載しています。

① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。

病害虫発生予報の見方について (続き)



予報等に記載される用語例

病害虫防除所が発表する予報等の病害虫に関する情報では、いくつか特徴的な用語を使用していますので、主に記載される用語について簡単に解説します。

・発病度、被害度

調査圃場における対象病害虫の発生状況を客観的に評価するため、調査株を被害程度別に区分・集計して数値化したものです。最小値は0で最大値は100となります。

・発生地点率

圃場巡回調査で、対象病害虫の発生や被害が見られた地点（圃場）の割合です。

・平年値

過去10年間の調査データの平均値です。調査を開始してから10年が経過していない場合は、○年平均値と示します。

・フェロモントラップ

主に性フェロモンを誘引源として対象害虫を誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。

・予察灯

夜間に電球を点灯し、光に集まる虫を毎日誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。